新潮社版

本周五郎全集

第七巻

山本周五郎全集**第七巻**　定価一五〇〇円

栄花物語

昭和五十七年二月二十日　印刷
昭和五十七年二月二十五日　発行

著　者　山本周五郎

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
業務部（03）二六六一五一一一　編集部（03）二六六一五四一一　振替　東京四一八〇八

印刷所　錦明印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社

乱丁・落丁本は小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kin Shimizu
Printed in Japan 1982

目次

栄花物語　五
附記　二六三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

栄花物語

栄花物語

月の盃

その一

外にはかなり強く風がふいていた。「やなぎ」というその料亭は、中洲の大川に面したほうに建っているので、二階のこの座敷にいても、岸を打つ波の音はやかましく聞えた。

「ずいぶんひどい波だこと」その子は衿を拭きながら云った、「この家の人たちは怖くないのでしょうか」

ちょうどあげ汐どきであった。水嵩も増していたのだろう、ときどきさっと、飛沫のかかる音も聞えた。この家の階下の羽目板を、うちあげる波の飛沫が叩くのであった。

青山信二郎は浴衣に細帯をしめ、腹這いになったまま、なにか書いたり消したりしていた。まわりには硯箱や、書きちらした反故や、部厚く綴じた幾冊かの草稿などが、とりちらしてあった。彼は朱筆を持って、舌打ちをしながら乱暴に消したり、また、細字でなにか書きこんだりしていた。

その子は右の腕をあげた。

彼女は鏡に向って化粧を直していた。鴇色のぼかしの長襦袢にしごき一つで、双肌をぬいでいた。ゆたかな胸のふくらみも、しなやかにひき緊まった脇腹も、剝いたように裸であった。

「あら、やっぱりそうだわ」

右の腕をあげ、右の乳房の脇を鏡に写してみながら、その子は信二郎のほうを（鏡の中から）睨んだ。

「やっぱり痕が付いてしまったわ、ほうら、みてごらんなさい、こんなよ」

信二郎はうんといった。しかし見ようともせずに筆を動かしていた。もう四時ごろであろう、この座敷は東に向いているので、障子を染める光りは、黄昏のように白けていた。その白けた光りのために、彼の蒼白い顔がいっそう蒼白くみえた。肉付の薄いほそおもてで、はっきりした眉と、下唇のやや厚い、への字なりに歪めたくちつきに、冷淡で皮肉な性格があらわに出ていた。

その子は中だかのおもながな顔で、少し長い顎がふっくりと、二重にくびれている。軀は小柄であるが、均整がとれているためか、ぜんたいがゆったりしてみえた。武家そだちの、十八歳という年に似あわず、おんもりとした身ごなしや、鼻にかかるあまえた声や、舌たるいような話しぶ

りや、またながし眼に人を見る眼もとなどには、おどろくほど嬌かしい媚があった。それは恵まれた環境で、拘束されずにそだった者の、自由でしぜんな媚であった。

その子はくくと含み笑いをし、あげた手をおろして、両の乳房をそっと摑んだ。あまり大きい乳房ではないが、そうして摑むとたっぷりして重たげにみえた。その子はそれをやわらかく揺ったり、手の平にのせて重みを楽しんだりした。

「いつまでなにをしているんだ」信二郎がそちらを見ずに云った、「早くしないと風邪をひくぜ」

「ときどきは、やさしいことも仰しゃるのね」彼女は横眼に信二郎を見た、「なんだか帰るのがいやになってきたわ」

「追い出されたいのか」

その子はやんわりと向き直って、からみつくように信二郎をみつめながら、あまく鼻にかかる声で云った。

「ねえ、信二郎さま」

「――いやだよ」

「――どうしても」

「もう時間だ、六時にみんなが集まるって、はじめに断わってあるじゃないか」

「だって、そうかしら」

その子は鏡のほうへ向き直った。気を悪くしたようすは少しもなかった。おっとりした手つきで、薄い乳色の化粧水を頬へなでつけながら、こんどは含み声で云った。

「月見の会をなさるって、仰しゃったでしょ、お十五夜に月見だなんて、あなたがそんな俗なことをなさるかしら」

「おれが俗なことをしないというのか」

「知っていらっしゃるくせに」

「こいつらの頭の悪さといったら」と信二郎は筆を投げた、「これで戯作の一つも書こうというんだからすさまじい、呆れ返ったもんだ」

舌打ちをして、彼はだらしなくごろっと横になった。飽き飽きしたというように、肱枕をして、その子のほうへ眼をやった。

「今夜はただの十五夜じゃないんだよ」

「――ただじゃないって、どんな……」

「自分で見てごらん」彼は欠伸をした、「亥の刻になればわかる」

「あらそんな、無理なことを仰しゃらないでよ、その子がそんなにおそくまで起きていられないことは御存じでしょ」

信二郎はまじまじとその子を眺めた。彼女の裸の腕は美しかった。手先のほうはすんなりと細く、小さくなっているが、二の腕から肩の付け根のところはむっちりとまるく、柔軟な弾力に満ちていた。風が障子を揺りたて、波の音があらあらしく聞えた。

「その子はいつ婿をとるんだ」
信二郎が怠けた声で云った。風の音でよく聞きとれなかったらしい。彼はもういちどそれを繰り返した。
「十月ですって、……なあぜ」
「どんな気持かと思ってさ」
その子は化粧の手を休めずに云った、「どんな気持だとお思いになって」
「それを聞きたいんだ」
「そうね、どんなかしら」その子はすなおな調子で答えた。
「——どんな気持でもないようね、そう、わたくしどんな気持でもありませんわ、それじゃあいけなくって」
「いいとも、もちろんいいよ」
信二郎は面白そうに自分で頷いた。
「だからおれはその子が好きなんだ」
「あら、どうして」
「十月に婿をとるんだろう」と信二郎は云った、「もう一年ちかくもおれとこういうことになっていて、まもなく婿をとるというのに慌てるふうもない、どんな感想もないというのはあっぱれだからさ」
「だってそれとこれとはべつですもの」
「それとこれとはね」信二郎は喉で笑った、「その子をみていると、いつも山の湖を連想する、どんなにごみや泥を投込んでも、ちっとも濁らない、投込んだ物はみんな底へ沈んで、水はいつもきれいに澄んでいる、なにものにも汚されたり濁されたりすることはないんだ」
「褒めて下すっているの」
その子は肌をいれて立ち、ゆっくりと隣りの部屋の襖をあけた。隣りの部屋は暗かった。そこには屏風がまわしてあり、その端から乱れた夜具の一部が見えた。彼女はしごきを解きながら、そっちへはいっていった。

その二

「もちろん褒めているのさ」信二郎は仰向きになりながら云った、「ほかの者だとそうはいかない、汚れたものに触れば汚れる、必ずなにか影響を受けずにはいない、しかも、自分が好んで汚れたのに、つまらない良心に咎めたり、めそめそ後悔したり、責任をひとに転嫁して自分をごまかしたりする、たいていの者がそうなんだ」
「だって悪いことをすれば、誰だって良心が咎めるし、後悔もしますわ」
隣りの部屋からその子が云った。信二郎はちょっとのま黙った、それから声を高くした。
「その子は後悔しないじゃないか」
「だってべつに悪いことなんかしやしないんですもの」
「そうだろうな、慥かに、その子はおれのことを、お婿さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

んにだって話しかねないんだ」
「いくらわたくしだって、まさか」
「まさか話さないか」
「それは必要があればだけれど」きぬずれの音をさせながら、含み声でその子が云った、「でもそうね、もしかするとうっかり話すかもしれませんわね」
信二郎は唇を歪めた。それから、強くなにかを慥かめるような調子で云った。
「人間が自分から好んですることには罪はないんだ、自分がそうしたくてすることは、その人間にとってはすべて善なんだ。反対に望みもしないことを望むようにみせたり、自分で信じないことを信じているようによそおうことこそ、罪であり悪というんだ」
「でも、そうだとしたら、世の中はめちゃめちゃになってしまうでしょう」
「そんな勇気のある人間は僅かなものさ、みんな臆病で胆が小さいから、世間の眼や人のおもわくばかり気にして、したいこともせず、肩腰をちぢめてもっぱらおとなしく生きているんだ、まちがった善とかありもしない道徳などというやつを守り本尊にしてさ、飼い馴らされた犬という恰好でさ」
「あなたがそんな、理屈のようなことを仰しゃるのは似あいませんわ」
その子の声はまったく話題に興味のないことを示していた。信二郎は黙った。さらさらと、帯の音をさせながら、その子が云った。
「済みませんけれどこちらへおいでになって、帯を手伝って下さいましな」
信二郎はぶしょうな返辞をし、さもだるそうに起き直った。すると、階段をあがって来る人の足音がし、「よしわかった」と云う声が聞えた。そして、その足音は廊下をまっすぐこっちへ来て、この座敷の外で停った。
「失礼ですが入ります」
こう呼びかけたが、信二郎の答えを待たずに、襖をあけて、三人の侍が入って来た。それを聞きつけたのだろう、その子が覗いて見て、「あらお客さまですか」と云い、ゆっくりと襖を閉めた。三人はむろんそれを認めたらしいが、なにも云わなかった。
はじめ信二郎はかれらを町方の役人だと思った。この大川中洲という処は、安永初年に新しく埋立てたもので、そこに料理茶屋が九十六軒も建ち並び、そのなかには建物の大きさと設備の豪華なことで評判の「四季庵」という料亭もあって、新吉原につぐ繁昌な土地になっていた。少しまえから芸妓という呼び名が一般的になり、川のこちらでは柳橋から米沢町、たちばな町あたり、向う河岸には深川のやぐら下など、芸だけを売りものにする妓たちがいて、こ

の中洲へもしきりに出入りをした。――こういう場所には（いつの時代でも）警吏の眼がひかる。必要なばあいはもちろん、必要がなくとも、かれらはその職権で随時に臨検をすることができた。組合番所のある新吉原はべつとして、そのほかの土地ではかれらの臨検を拒むわけにはいかなかった。

――たぶん町廻りだろう。

信二郎はそう思ったのであるが、三人の服装や態度をみて、すぐにそうでないことがわかった。ようすからみて、少なくとも与力や同心でないということは慥かだと思えた。三人のうち二人は若く、一人は三十五六になるだろうか、髪の毛が赧く、角ばった顔で、薄い眉の下に眼がするどく切れていた。少なからずいかつい相貌をしているが、ものごしは案外に柔らかく、言葉もかなり丁寧であった。

「私は大目付の関忠之進という者です」

その中年の侍は立ったままで云った。

「失礼ですが、役目の上で少し調べさせてもらいます」

「ああどうぞ」信二郎は頷いた、「しかし、大目付はどのお係りですか」

「宗門改めです」

「ほう、するとキリシタンの疑いでもあるんですか」

相手は答えなかった。若い二人に眼くばせをすると、黙って座敷の中へ進み入り、そこにちらばっている草稿の反故を取って、手早く、しかし入念に調べだした。信二郎は微笑した、皮肉な、面白がっているような微笑で、じろじろと若い二人の侍を見やり、また関忠之進のすることを眺めた。

「これはそこもとの書いたものですね」

忠之進はこう云ってこっちを見た。

「まあ、だいたいそうです」

「だいたいという意味は」

「つまりこうなんです」信二郎はうす笑いをうかべたまま云った、「原案を私から与えると、そこに署名して戯作者たちが文章にし、それをまた私が直すというわけなんです」

「ずいぶん念のいった仕事ですな」

「あの連中は頭が悪いですからね、そうでもしないともものにならないんです」

忠之進はなにか云おうとし、ちょっとためらったが、若い侍の一人を招いて、いま調べたものを一つに纏め、「これは預かってゆきます」と云ってその若侍に渡した。信二郎はさも訝しいといった表情で、「それが宗教となにか関係でもあるんですか」

「少し違うかもしれませんね」そう云って、忠之進は矢立と懐紙を取出した、「どうか御姓名と身分を云って下さい」

「いやだ、……と云ったらどうしますか」

忠之進は黙っていた。信二郎は軽く笑った。
「小普請組の青山信二郎という者です」
「支配はどなたですか」
「たしか宮城さんでしょう、暫く出ないから変っているかもしれないが」
「お住居は」
「日本橋きつね小路という処です、どうか気を悪くしないで下さい、本当にそういうんですから」
忠之進は聞いたことを書きとめると、隣りの部屋のほうへ眼をやった。
「あちらに婦人がいるようですが、どういう方ですか」
「逢曳の相手ですよ」信二郎の口ぶりはひどく露悪的だった、「むろん武家の者です、四千石の交代寄合の娘でしてね、調べるのなら呼びましょうか」
「いや結構です」
忠之進はするどく顔を歪めた。信二郎の態度があまりに大胆で、自分からずけずけと聞かぬことまで云ってしまう。まるでからかってでもいるような感じなので、すっかり肚を立てたようであった。
「いずれ出頭してもらうことになるだろうと思います、どうかそのおつもりで」
彼はこう云って座を立った。信二郎は黙って頷いた。関忠之進は唾でも吐きたそうな顔つきで、二人の若侍を伴れてさっさと出ていった。
「――なあにあれは」
その子がそっと襖をあけた。
「田沼さまのお手先さ」と云って信二郎は立ちあがった、「おれの金儲けのたねがお気に障ったとみえる、尤もいつかやられるだろうとは思っていたがね」
「だって、なにをお書きになったの」
「田沼さまの悪口雑言さ、いま世間で評判になっているやつはたいていおれの知恵から出たものなんだ、が、まあそんなことはどっちでもいい」彼はその子のほうへいった、「帯をしめてやろう、もういそがないとおそくなるぞ」
ええといって、その子はこちらへ背を向けた。心配なようすは少しもなかった。彼が本当に大目付へ呼び出されるか、呼び出されてどうなるのか、そんなことはまるで気にならないというふうであった。――信二郎にはそれがいかにも好ましいらしい、うしろから肩を抱いて、そっと頬ずりをした。
「その子はいいやつだ、ほかの者にはわかるまい、決して理解できないだろうが、おれにはよくわかる、その子はまったくいいやつだよ」
その子は擽ったそうに含み笑いをした。そして髪が乱れるのも構わず、頭を反らせて、男の頬ずりに応じた。あまい化粧の香に包まれながら、信二郎は低い声で囁いた。

「この、きれいな、かわいい、けだものめ」

その三

天明三年の八月十五日には月蝕があった。当時の予報はまだまだして広範囲には行われなかったが、明月の晩の月蝕は珍しいので、亥の上刻に欠けはじめるということは、かなり広く江戸市中にひろまり、市民たちに大きな期待と興味をもたせていた。

その日の午後二時ごろ。河井保之助は麹町平河町の家で母に小遣をねだっていた。

「青山信二郎の家へ月見に呼ばれたんです、五六人集まる筈なんですが、そのまえに、軽子橋へ寄っていきたいんです」

「――軽子橋になにか御用なの」

「叔母さんの七回忌があるんです」

母親のいくはちょっといやな顔をした。

「おそらく誰もゆきゃあしないでしょう」と保之助は云った、「私くらいのものだろうと思うんですが、手ぶらでゆくわけにもいきませんから……」

「お許しを受けたんですか」

「父上にですか、青山へゆくことだけ云いました、軽子橋のほうはだめにきまってますから」

いくは針箱の抽出から財布をとり出した。端切で作った小さな財布で、もう古くもあるしすっかりよごれていた。切地の色も縞柄もわからなくなっていたが、それは、かれら兄妹たち四人にとって、昔から馴染の、有難く尊いものであった。幼いじぶんには、それを見るといつも胸がどきどきしたものであった。

「その財布もずいぶん古くなりましたね」保之助は懐かしそうに云った、「ずいぶん昔からおねだりをするたびに見るんですが、いつごろお作りになったものなんですか」

「たぶん娘じぶんでしょう、もう忘れてしまいましたよ」

いくは財布の中から若干のものを出し、紙に包んで保之助に渡した。そして、その財布を手にのせて見ながら、ふと淋しげな微笑をうかべた。

「こんな物をいつまでも持っているなんて、母さんもいいことはなかったのねえ」

さりげない口ぶりであったが、保之助は胸を突かれたように思い、返す言葉もなく頭を垂れた。いくは保之助を見て、冗談のように云った。

「あなたはもうすぐ藤代へゆくんだから、いったらお嫁さんをいたわっておあげなさいよ、なんといったって、女の幸不幸は良人しだいですからね」

保之助は礼を云って立った。外へ出ると強い風で、道にはしきりに埃が巻いていた。気持は重かった、軽子橋の島

田では、保之助にとって叔母に当る人の七年忌で、その法事の知らせは、十日もまえに平河町の家へ来ていたが、父の成兵衛はまるで取合わなかった。

——誰もゆく必要はないぞ、と家族たちぜんぶに、渋い顔で云った。

父と島田の叔父とは仲が悪かった。成兵衛は島田家の長男であり、叔父の義平は二男であった。長男が河井へ婿養子にゆき、二男が家督を継いだわけで、もちろん理由があったのだろう。親族のあいだでは、兄弟の父の兵庫が義平のほうを偏愛していたからだ、と信じられているが、仲の悪いのもそのへんに原因があるようにいわれていた。——しかしその家督の問題がなくとも、二人は性格のうえで合わなかったに違いない。義平のほうは浪費家であったし、成兵衛は殆んど吝嗇にちかかった。弟は千石の家を潰しかかっているが、兄は貧しかった養家を裕福にした。

——平河町は守銭奴だ、と義平は云い、——軽子橋は屑だ、と成兵衛は云った。

義平の貧乏はいまひどい状態だった。法事を家でするのも、寺でやる費用がないからであった。親類といっても、(平河町のほかは)みんな同じ貧乏旗本のことで、ひとの法事に金を貸すようなゆとりはどこにもなかった。仮に多少のゆとりがあったにしろ、軽子橋に貸すような者はもういなかった。島田は一族の宗家で千石の知行を取っている、本来ならわれわれの面倒をみる立場ではないか。

——あんまりだらしがなさ過ぎる。なにをしてやってもむだだよ。

親類の者はそう云うのであった。

——どうして平河町へゆかないんですか。

義平が平河町へゆく筈はなかった。河井のほうでも、軽子橋へゆくのは保之助だけで、兄たちも妹も義平のことは嫌っていた。

——あれが叔父だなんて、恥ずかしくって人に云えやしない。

こう云っているが、その兄や妹たちは、叔父の言葉をそのまま使って、父のことを「うちの守銭奴」と呼び、叔父を軽蔑するよりも強く、父を憎んでいた。——河井家は二千石の寄合であるが、他の多くの例にもれず、経済的にはずいぶん逼迫していた。それを「内福」などといわれるまでにたて直すのは、尋常いちようのことではなかったに違いない。また生産のない、消費だけの生活では、出費を制限するほかに手段はないであろうが、これらの条件を考えても、なお成兵衛の吝嗇はひどいものであった。

母親のいくは家つきの娘であるが、彼女でさえ一文の銭も自由にならなかった。金はぜんぶ成兵衛が握っていて、日常の雑費から家族の小遣まで、定った日に定額ずつきちんと支給された。たまに臨時の必要があっても、よほどの

ことでないと出して貰えないし、出して貰えるばあいにはうんざりするほどの小言を覚悟しなければならなかった。信兵衛、高之助、保之助、しほの四人兄妹は、玩具も持たなかったし、菓子という物も知らずにそだった。ぎりぎりに切詰めた生活のなかで、兄妹の唯一つのたのみは、「母の財布」だったのである。もちろんいつでもというわけにはいかなかったが、その古ぼけた小さな財布の中には、母親が爪で削るようにして溜めた幾らかの銭があって、僅かながらかれらの夢を満足させて呉れた。

保之助はいま婿養子の縁組がきまっていた。相手は藤代外記という四千石の交代寄合で、十月には祝言をする筈であった。

——保之助は果報者だよ。

兄たちは羨ましげに云った。

——四千石の交代寄合で、娘は評判の美人だというじゃないか、おれなら五人扶持のおたふくでも喜んでゆくぜ。

——この家から出られるならね。

長兄の信兵衛までがそう云うのであった。

平河町の家から軽子橋まで、かなりいそぎ足でいって半刻ちかくかかった。島田の家は橋の手前を右に折れて、堀ぞいに一町ばかりゆくのであるが、その橋のところまで来て、保之助はふと足を停めた。——橋の左がわの堀端に、三十人ばかりの（人足らしい）男女が集まって、ひどく昂奮した声でなにか騒いでいた。

「なんてひどいまねをするんだ、あたしたちのような、こんなしがない者の血を吸おうってのかい」

女の声であった。きんきんとつんざくような声だったし、その叫びにはぞっとするほどのつきつめたものが感じられた。

「鬼だってこんなひどいことをしやあしないよ、いいえ云ってやる、あたしゃ黙っちゃいられないよ」

「そうだ、おらだって云ってやる」四十ばかりになるべつの女が喚いた、「おら病人の亭主と五人のがきを養ってるだ、おらの女のこの軀で、六人口を養ってるだ、おらが膏汗を絞って稼いでも、かつかつ粥が啜れるか啜れねえ始末だに、その銭から運上を取るなんて、いくらお上でもあんまりじゃねえか」

「男衆はなぜ黙ってるだ」

ほかの女たちがいっせいに、殺気立って叫びだした。

「こんな非道なまねをされても、おめえたちは黙って首をすっこめてるだか」

「おめえらそれでも男か」

「こいつら黙らねえか」

女たちの叫び声を圧して、がさがさとしゃがれた男の喚き声が聞えた。それは五十あまりになる固肥りの、背の低い、髭だらけの男で、半纏の下から毛だらけの太腿をだし、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com